

アジアの建築・ニューディレクションシンポジウム報告

日本の立脚する「建築文化のスタンス」とは、 自国やアジアとしての批評性を持つことである。

AAアジアの建築家グループ（19名）の来訪を機に8月11日、フォーラム・ジャパンとAAアジアの主催、JIA後援で「アジアの建築・ニューディレクション」をテーマにシンポジウムが行われた。近代化の中でどこに行っても同じような都市が生まれている現状に対し、今後、地球的な視点とアジアの視点のバランスをどのように考えていけばよいのかというのが論点である。

開会の挨拶で仙田会長は、「地域的であると同時に地球的であるべき、特にアジアの子供のための空間は少ない」と話され、地球環境、子供環境の大切さを指摘された。基調講演はシンガポールの建築家でAAアジア代表のウィリアム・リム氏である。「建築の動向や歴史の変遷について今までは西洋の価値観が支配的であった。しかし今日の地域性の欠如や都市のアイデンティティの喪失などの問題は西洋理論を越える所で起きている。従って、アジアの視点における建築の批評性が重要であり、非西洋の知識人に批評性が必要となってきている。しかし現状は西欧の理論に追いついていない。」とアジアの視点における批評性について問題提起をした。この後、アジアの建築家3人と日本の建築家3人のプレゼンテーションが行われた。

インドの建築家、カラン・グローバー氏は「チャンパナールで30年間保存に関わる中でインドの文脈で建築を見ることが大切と考えるようになり、環境について常に留意して設計している。その手法として①コートヤード②ウインドキャッチャー③ダブルスキンを用いている」と事例をもとに説明した。マレーシアの建築家、リム・ティン・ニウム氏は、氏が設計した傾斜地に建つ住宅をあげ、「竹林と建物との調和を考えると共に地面の傾斜と屋根の傾斜を合わせるデザインをした」と述べ、周囲の環境の読み取りと関係性の大切さを指摘した。シンガポールで活躍しているタン・コック・ヒアン氏は「シンガポ

ールは西洋化しており、西洋に対して常に圧力を感じている」と述べ、モスクの設計においてアラブの装飾のパターンを分析しデザインに活かした事例を説明した。そして「既にあるものを引き継ぐと更に魅力的なものになる」と強調した。

日本からは、芦原太郎氏が経済の原理が都市をつくっている問題を指摘し、「建築家がどう関わるべきかを考えることが大切」と述べた。氏が設計した白石第二小学校の事例をあげ、参加の設計の中でオリジナルなものができることを説明した。古谷誠章氏は、近代建築の整理され過ぎた問題を指摘し、「持続可能なゴチャ混ぜ建築を心がけている」と述べ、アジアの街の自然発生的な混在の面白さを説明した。そして市民参加の設計の事例として茅野市民館をあげコンセプトが生まれたプロセスについて述べられた。手塚貴晴氏は、氏が設計した屋根の家、ふじ幼稚園、森の学校キョロロの事例をあげ、「施主が屋根の上に昇るのが好きということが屋根の家の発想となり、既存の木を残すということが日除けへの利用に繋がり、雪に覆われることが雪を見せる」という発想になったと、デザインの経緯を述べ、シンプルにつくることの大切さを説明された。

休憩の後、連健夫氏の進行でパネルディスカッションが行われた。最初にウィリアム・リム氏から6人のプレゼンテーションの印象として、「大きく3つのカテゴリがあった。1つは持続可能性である。これは誰にとってもメリットがあるのかということを常に問うことが大切である。2つめは市民参加である。意見を聞く市民と設計者は対等なパートナーであるのかどうかをはっきりさせておく必要がある。3つめは新しい実験である。

今回のトリップの中で、荒川修作氏の三鷹の集合住宅を見たが、あれは都市における建築のグラフィティと言え、芸術で街に問題提起をしている。建築家にとって新



開会の挨拶をする仙田会長



コーディネーターの連健夫氏



パネル（左から）：カラン・グローバー氏、リム・ティン・ニウム氏、タン・コック・ヒアン氏、芦原太郎氏、古谷誠章氏、手塚貴晴氏

しい実験は常に必要である」と述べ、アジアの建築家と日本の建築家の発表内容の共通性を取り上げた。次にパネラーに対して、進行の速いから次々に質問が投げかけられた。日本の建築家のプレゼンテーションの印象について、カラン・グローバー氏は、「本質的に日本のものを感じる、これは無意識的なのか意識的なのか、理由が聞きたい」と逆に質問を返した。これは難しい問いであるとの応答から、植民地における近代化の危機意識の違いについて発言が求められた。リム・ティン・ニョム氏は「戦前に日本の文化に無理に染められた悲しい歴史はあるが、これからは文化の差異の中でネットワークをつくり、文化の融合をすることが大切」と創造的視点の大切さを指摘した。

地域文化を活かした建築について手塚氏は「日常生活から(らしさ)を発見することにより、なつかしい未来をつくることができる」と述べ、タン・コック・ヒアン氏は、「ヴァナキュラーの要素をとりあげることは設計条件を増やすことではある、しかしアジアのアイデンティティを現代に継承することになるので大切な姿勢である」と述べた。また地球化との関係について、芦原太郎氏は「ボーダーレスになり豊富な情報の中で、建築家は自由に設計できるが故に、常に良心が問われる」と述べ、古谷氏は「テクノロジーの発展の中で、人はどのように調整しているのかという文化の視点で考えることが大切」と述べ、建築家の姿勢について話が及んだ。会場からは、大野秀俊氏が歴史的な視点から文化の変遷を捉えることが大切とのコメントがあった。

最後のまとめとしてウィリアム・リムのコメントは、日本のユニークな位置づけについてであった。「欧米を追随する近代化の中で、日本は西洋の国のようにふるまってきたが、結果、日本は欧米クラブには入れなかったという歴史がある。それでは日本はどこに立脚すれば良いのか、それは日本としての批評性を持つことであり、アジアとしての批評性を持つことである。その中で、今後どこに向かうべきなのかが、おのずと見えてくるはずである」と指摘した。

ディスカッションの後は懇話会である。多くの方が参加した。アジアから来た19人の建築家と交え、様々なところで議論がおこなわれていた。このテーマを大切さと

参加者の関心の高さがそうさせたのであろう。アジアの建築家達との創造的な交流になったシンポジウムである。

＜進行役、シンポジウムの企画者・連健夫氏＞

地球化とアジアの視点とのバランスをテーマにディスカッションをして、これからのアジアの建築を考えると、という狙いに対して、内容の濃いシンポジウムとなったと思う。特に環境問題や市民参加という今日的な視点は、ヴァナキュラーな視点と繋がるため、その中からアジアのアイデンティティを見出すことには意味がある。日本は植民地を経験しておらず、近代化と西洋化は国のアイデンティティを脅かす強い対象ではなかっただけに、他のアジアの建築家達との問題意識の差を常々感じてはきたが、今回の熱い議論と交流の中で少しは理解が深まったのではないかと思う。

環境への配慮、文化の保存や継承の大切さについては誰もが認識している。しかしヴァナキュラーの現代化は、文化を取り入れる意味で広い見識が要求される点、また近代建築における機能美の洗礼を受けた価値観からは評価されにくい点、などの理由から、真正面から議論をされる機会は多くない。しかし、日本とアジアの建築家達の熱いディスカッションとメッセージは、何らかの形で参加者に伝わったものと思われる。

ウィリアム・リム氏が指摘した建築の批評性は重い。日本における建築ジャーナリズムの功績において彼の口からA+Uの編集長であった中村敏男氏の名前が出た。その批評性が現在の日本の建築からは感じ取ることができないとのメッセージである。建築家自身が批評性を持って設計に携わることにより、おのずとアジアの視点における今後の建築の望ましい在り方が見えてくるであろう。

AAアジアの建築家グループは元々AAスクールの関係者による集まりであったが、その後、誰でもが参加できる開かれたアジアの建築家のネットワークとなっている。毎年各国を訪問し視察とシンポジウムを続けている。今回は私が担当し、長野と東京の建築を見て廻った。その道中、彼らから様々な印象と意見を聞くことができ、日本の中からでは気が付かない多様な視点を与えてくれた。アジアの建築家のみならず、国際的な交流は今後、益々大切になってくると感じる経験であった。



ウィリアム・リム氏



シンポジウム会場風景